

○理事（辻泰弘君） では、まず工藤参考人からお願いいたします。

○参考人（工藤啓君） 父親の方がなかなか現れないのは、参考ですけれども、労働政策研修・研究機構の小杉先生が「フリーターとニート」という本でニートの年齢別の割合を出しています。十五歳から十九歳が三〇%、二十から二十四歳が二〇%、二十五歳から二十九歳が二〇%、三十歳から三十四歳が二〇%です。ただ、相談を現場で受けるに当たって、この年齢層が、相談に来る当事者の若者に全然会わない、十五歳から十九歳は五%以下です。二十歳から二十四歳が三割ぐらい、二十五歳から二十九歳の相談が五〇%、三十歳から三十四歳が一五%、三十五歳から四十五歳までが五%ぐらい。二十五歳から二十九歳が多いという理由はあるんですけども、単純にお父さんの年齢を考えると五十歳から五十五歳が一番忙しいんじゃないかと。来れないというのがもしかしたらあるんじゃないのかなと一つ思っていますし、世代的にまだお母さんが働いてらっしゃるというのは少ないです。男女共同参画とかあるんでしょうけれども、世代的のものだと思いますが、お母さんの方が専業というパターンが多いです。

保護者向けの若者セミナーというのは、基本的にはニートとか引きこもりとかそういう家庭って家庭ごとニートだったりする。余り外側の付き合いがなかったりとかして、自分たちが子供のことについて相談する知り合いを持ってないという場合があります。お母さん、三百六十五日、例えば二十歳の男の子がニートで三百六十五日家にいたら外にも遊びに行けませんし、だれかに相談することもできません。すごく心理的なプレッシャーを感じて苦しい状況になっているときあるんですけども、親向けのセミナーの一つの役割は保護者同士が仲間をつくること、そして相談できる相手をつくるのが一つです。

母親と父親の役割って、講演とかでよく出すんですけども、父親の役割っていうのは意外と前面に出てはいけないというのがありまして、なぜかというと、不登校でもニートでも引きこもりでも兄弟でそういう状態に陥る率がとても高い。なぜかというと、本人に対して母親と父親が二人とも一生懸命になることによって、ほかの兄弟がすねる。何で、お兄さんはあんなのに私は全然構ってもらえないんだ、一生懸命頑張っているのにみたい。それで、お父さんの役割というのは、お母さんのガス抜きとほかの兄弟へのケアというのは基本的に決まっています。ただ、仕事について考え出したりとかちょっと体験で仕事をしたときに、お酒でも飲みながらしゃべれるのは父親で、そこで案外父親と仲良くなったりというのはあるんですけども。

公的な窓口というお話がありましたが、私も行政との連携でいろいろやっただんですけども、何でわざわざ民間で保護者向けの相談窓口をつくるか。公的な機関は一民間団体を

紹介できません。責任の問題があるからです。そうすると、僕らとしては適材適所で、あそこの民間団体かもしれないし、あそこの行政を紹介したいと思うかもしれない。僕らが紹介するのは自由なんですけれども、行政窓口で一民間団体を責任を持って紹介することは恐らく難しいと思います。

そういう意味で、行政の方がやってくれば一番お金も掛からなくていいんですけども、行政の方が、例えば民間団体に一任しているから、あそこの紹介したところは民間団体が紹介したところというような形でお仕事を受けたりとかできた方が、本来必要な支援を求めている人に対して必要なところを紹介しやすいんじゃないかと思っています。

以上です。

○理事（辻泰弘君） では、玄田参考人、お願いします。

○参考人（玄田有史君） ニートの問題と失業問題のどちらを優先的に取り組むべきかというふうな御質問いただきました。

大変難しい御質問なんですけど、あえて一言でお答えするとすればこういうことになろうかと思います。もし経済を優先するのであれば、恐らく失業対策を優先させるべきであろうと。ただ、社会問題として考えるとすればニート対策が優先されるべき。別の言い方をすれば、成長ということを考えると失業対策がまず最優先されるべきだけれども、安心ということを考えるとニート対策ではないかと。

それはこういうことです。失業者になる人はニートと比べると比較的高等教育を受けている人が多いです。それだけ過去に教育水準を、教育投資をしっかりとしています。こういう人が働かないというのは大変損失が大きいです。また、ニートに比べると失業者は過去に就業しているいろんな経験を持っています。逆に言えば、ニートは時には本当に一から教えていかなければいけないときがあります。こういう潜在的な成長性とか経済力、能力を持っているという面で行くと、失業者がこれだけ多いというのはやっぱり大変な社会問題だろうと。数からしてもやっぱりニートに比べれば失業者が多いものですから、そういう面では失業対策というのは、決して重要性が低下しているわけではなく、これからの経済の成長ということを考えていくと大変重要だと思うわけです。

ただ、一方でニートの家庭は、先ほどお話ししたような比較的経済的に恵まれないケースが多い。また学歴的にも、高校卒のみならず、高校中退とか中学卒の人たちもそれはびっくりするぐらい多い。よくセーフティーネットという議論が出てきますが、もしかしたら社会のセーフティーネットというのは、ニートにいったんなってしまった人でも社会にもう一度入り直せるような環境をつくるとすると、先ほど正に広田先生おっしゃったように、だれでもニートになり得る可能性がある。ニートの話をすると、若者はみんな決まって自分と実は紙一重だって言います。みんな人付き合いが苦しくて、目標が持てずにやりたいことが見付からないって言います。こういういったんニートになった若者に対しても、またなりそうな若者に対しても、ああ、自分でも何とかなるんだ、そういう安心を与えることができるとするならば、やっぱりニート対策というのは、単に既に現状ニートになっ

ている若者のみならず、社会全体に本当に安心を与えることになると思うんです。

そういう面では、実は私は思うのは、ニート対策と言うのは良くないのかもしれない。失業には失業対策というのは必要なんですが、ニートはニート祭りぐらいで本当にいいんじゃないかと思っています。つまり、ニートの問題を考えるときには、社会がもっと楽しいものだよって、そういう、ここに、みけんにしわ寄せるのではなくて、こっちにおいでよって、そういう大人が本当に若者たちを巻き込んでいくようなわくわくするもの。実際、ニートを支援している団体のお話を聞くと、しんどいけど、やっぱり楽しそうです。やっぱり若者たちが顔が変わっていく。トライやる・ウィークのように一週間大人と交わることによって、本当に若者は顔がびっくりするぐらい変わっていきます。小さな自信を身に付けていきます。そのために大人がちゃんと子供たちの目線で、しかるべき部分はしかる、また褒める、言葉で褒めたり目で褒めたり、そういう体験をする、そんな広いお祭りになっていけば社会は変わっていくし、本当にニートに考えなきゃいけないのはそこだと思っています。

だから、私は、ニートに関して本当に一番必要な、そして簡単にニート対策になるものがあると思っています。それは、トライやる・ウィークのようなことを十一月の第二週、全国で一斉にやることです。全国で一斉に十一月の第二週、月曜日から金曜日まで、みんなが若者と大人が本気で向かい合う一週間にして、日ごろ街角や電車で注意できない若者たちも、今週は「トライやる」の週だろうって大人が本気で怒るような、そういうお祭りになれば必ず変わります。

中井さんのような本当に若者たちのことを真剣に考える大人は、私は全国に少なからずいると思います。そういう人たちを一つのお祭りに巻き込んでいって、ああ、社会に出ていくというのはそんなに考え過ぎなくてもいいんだって、自分でも何とかなるんだって、そう感じられる、みんなが笑ってニート対策をできないと、おっしゃったように、社会保障制度が維持できなくなるからとか労働力不足が深刻化するから、だからニート対策をやるんだとって、そうか、労働力不足になるから僕は働こうというニートはいません。

ニートに関しては、本当にいい意味でのおせっかいをちょっとしたお祭りとしてやるぐらいの、そんな気楽さを持ってみんなを巻き込んでいくことが一番大切で、そういう面では失業対策とニート対策というのは両方必要だけれども、やり方とか目指すものが違うんだろうと、そういうふうに思っています。

○理事（辻泰弘君） では、杉本参考人、お願いします。

○参考人（杉本健三君） 先ほども少し申し上げましたけれども、トライやる・ウィークをやる前にそれぞれの学校でかなり入念に事前指導をいたしております。もう中学二年生になれば、私たち「トライやる」に行くんだということはもちろん十分に知っておるわけですが、学校で、どんなことをやるのか、どんな意味があるんだろうな、どんなところへ行きたいといったふうな事前指導を十分にやる。そして、場合によっては企業の方に学校の方に直接来ていただいて、事前に仕事等についての話をさせていただいておる学校

もたくさんあります。

〔理事辻泰弘君退席、会長着席〕

そこで、今御質問がありました不登校の生徒でありますけれども、不登校の生徒に対しても、それぞれ学級担任の先生が、学校へ出てこれない子には何回も家庭訪問をして「トライやる」についての話をし、どんなことしたい、どんなところへ行けそうとかいったふうな話をする中で、あの子と一緒にどこへ行きたいとか、あるいは僕一人だけでやりたいとかいろんな子供がいるんですが、場合によっては、そのお子さんがやりたいこと、たった一人であっても活動場所を探し出してきて、そしてあてがうといったふうなこともある中で、先ほど申し上げましたように、不登校ぎみの生徒のうちの三分の二ぐらいは「トライやる」に参加をしております、そのうちの七〇%ぐらいは五日間丸々出席しておるといったふうな状況があります。

なぜこのようになるのか。先ほど、先生が生徒の良さが引き出されたのかといったふうなお話もございましたけれども、具体的には、子供たち、学校へは不登校なんだけれども、学校と違うところに行ったら、そこには友達もいないし先生もいないし、学校でもない、やることも違うということで、結構踏み込みやすい雰囲気があるようでございます。さっきも少し申し上げたんですけれども、そういう中で何か自分もできるということで、今までになかった自分の良さとか、自分が知らなかった新しい自分といたしまししょうか、自分の心の居場所を見付けたり、場合によっては職場の人と何か話ができる、新しい人間関係ができたり、こんなふうな形で、その後、よりそれが広がって行って学校へも来れるようになるような生徒がかなり出てきておることは事実でございます。

実は、本県では、不登校生徒が何とか元気を出すための施設、やまびこの郷というのをつくっておるんですが、そこでは一週間保護者の方と一緒に泊まり込んでいろんな体験をするんですけれども、そこにおいてもやはり不登校の子供を、新しい人との出会い、自然との出会いの中で何か体験すると、そういったふうな中で新しい自分を発見するきっかけになっておりますので、「トライやる」はそういうふうな一面もあるのかなと、そういったふうな効果もあるのかなと、こういうふうに思っております。

以上でございます。